



# 少女を誘う

---

---

芳田尚哉

---

## 少女を誘う

---

あたしはラインのチェックをしながら歩いていた。

ドンっ。

「あっ、すみません」

誰かとぶつかってしまった。

顔を上げると、それは若い夫婦だった。

「本当にごめんなさい」

歩きながら、スマホを操作していたあたしが悪い。

「本当にごめんなさい」

あたしは何度も頭を下げる。

しかし、その二人は特に責めるわけでもなく、ただあたしをじっと見ている。

許してくれたのかな？

そう思って歩きだそうとすると、

「すみません。私たちの娘を知りませんか？」

奥さんがあたしに訊いてきた。

その顔はとても真剣で——って、娘を捜してるなら当然か。

「ごめんなさい。見てないです」

この人たちの娘なら、小さい子だろう。あたしは、今日はそんな女の子を見てない。

「どんな子ですか？」

とりあえず特徴を聞いておこう。

「サクラは、桃色のカーディガンに赤いスカートで……」

彼女は娘を思い出しながら教えてくれる。

「そうそう、長い髪を後ろでまとめてるわ。あの子、蝶のアクセサリが好きで、大きな蝶の髪留めをつけてるの」

そんなわかりやすそうなものを身につけてるなら、きっとわかるだろう。

「わかりました。それじゃ見つけたら……」

連絡先を聞いておこうと思ったら、いつの間にか二人はいなくなっていた。

「どうしよう……」

見つけてもどうしたらいいんだろう？

「まあ、見つけたら、その子に教えてあげればいいか」

「あれ？ カズミじゃん。こんなところでなにしてるの？」

前から友人たちが歩いてきた。

「ん～、別に」

どう説明したものか。

そもそも、特になにをしてたわけじゃないし。

「一人で立ってるから、変だと思ったんだけど」

「そうそう。ぽつんって立ってたよね」

「さっきね、子供を捜してるって夫婦がいて……」

一応、説明すると、へえ～とそれだけだ。まあ、そんなもの。  
結局それから、その友人たちと一緒に、遊びに行く事にした。  
あたしは、その子がいなか気を付けていたけど、結局見つからなかった。  
きっと、あたしが見つけなくても、両親が見つけてるよね。

それから二週間が経った頃、あたしはそんな事があったのをすっかり忘れていた。  
一人で繁華街に来ていた。目的は特になくて、なにかいいものないかなって感じ。  
ぶらぶらと歩いていると、スクランブル交差点に目がいった。

「あれ？」

そこには、もちろん人の流れがある。  
そんな場所に、ぽつんと立っている女の子がいた。  
妙に浮いていて目立っているんだけど、誰もそんな事を気にしない。  
邪魔だな……とは思うけど、それだけの事だ。  
あたしもその一人だった。遠くから見てるだけだったけど。  
だけど、その時だけは違った。  
あたしは、その女の子から目が離せなかった。

「あの子……」

桃色のカーディガンに赤いスカート。そして、蝶の髪留め。  
そう——いつだったか、あたしがぶつかってしまった夫婦が捜していた女の子だ。  
知らせなきゃ……とは思ったけど、あれからかなり経っている。さすがに、もうその必要はないだろう……。

「もう、大丈夫だよ」

あれからずっと……なんて事はないだろう。

「……………あれ？」

そんな事を考えていると、人の波の中で見失ってしまった。

「……大丈夫、だよ」

遠くでクラクションが鳴っていた。

そんな事も忘れてしまった頃、大きな地震があった。  
昼間の事だったので、あたしは外を歩いていた。  
パリパリとビルの窓ガラスが降ってくる。  
あちこちから叫び声が聞こえる。  
あたしも、バッグで頭をかばいながら走っていた。  
どこへ行けばいいのかわからず、とにかく走っていた。

「……あっ」

そんな時、あの女の子を見つけてしまった。

ずっと忘れていたはずなのに、その子を見た瞬間、あの子だってわかった。

危ない……そう思わずにはいられなかった。

なにしろ、その女の子は逃げる人の中、ぽつんと立っているのだ。みんな、女の子を避けるように走っている。

一緒に逃げた方がいいのかな……。

なんて思っていると、年輩の女性が女の子になにか話しかけて、それから一緒に走って行ってしまった。

きっと、危ないから一緒に逃げよう……とかそういう事を言ったんだろう。

「それどころじゃないって」

その子も心配だけど、あたしはあたしでピンチだ。

さすがにもうガラスは降ってこないけど、ここが安全かとなればそうでもない。もっとも、地震だったらどこにいても変わらないかもしれないけど。

できるだけ頑丈そうな建物を目指す。

みんな同じような事を考えているから、人の波に乗っていけば問題ない。

避難したところで、あの夫婦を見つけた。

「あの……」

声をかけながら近付いていく。

二人はあたしをじっと見て、どうやら思い出したみたいだ。

「確か、あなた、前に……」

「あの……娘さん、あっちの方にいましたよ」

女の子が向かった方を指す。

「そうですか。ありがとうございます」

奥さんが頭を下げて、そっちへ向かおうとする。

「危ないですよ。落ち着いてからでも……」

そう声をかけても、二人は聞いていなかった。

「ありがとうございました」

もう一度お礼を言って、そのまま走っていく。

避難しようとしている人たちと逆方向なのだが、夫婦はするすると走って行ってしまふ。

「やっぱり、自分の娘が心配だよ」

そう思っていると、あの女の子がこっちにやってきた。

「あれ？ すれ違ったのかな？」

両親が向かったはずだけど、あの子は一人だ。

「ねえ、さっきあなたのお父さんとお母さんが、あなたを迎えに行ったわよ」

女の子の前にしゃがんで話しかける。

「えっ？ お姉ちゃん、そんなはずないよ」

どうやら会ってないみたいだ。

「でも、さっき……」

「だって、わたしのお父さんとお母さんは、もういないもん」

「えっ？」

もういない？

「そんな事……」

ふと顔を上げると、女の子の後ろに、両親の姿があった。

「ほら、そんな事ないでしょ。だって、ほら、後ろに……」

彼女の後ろで、両親が笑顔で手招きしている。

「えっ？」

女の子は振り向いて青ざめる。

「お父さんとお母さんでしょ？」

どうして、こんなにびっくりしているのかわからない。両親に会えて嬉しいはずなんだけ  
どな……。

もしかして、喧嘩でもしてて気まずいのかな？

「やだあ」

女の子は泣きながら逃げ出した。

「ねえ」

あたしはどうしていいかわからず、とりあえず追いかける事にした。

「ねえ、どうしたの？」

なんとか追いついて訊く。

「お姉ちゃん、どうしているの？」

女の子は、涙でぐちゃぐちゃになった顔で訊いてくる。

「えっ？」

「お父さんとお母さん、死んじゃったのに、どうしているの？」

死んでる……？

そんな……。

だって、目の前に……。

「サクラ、こっちにおいで。一緒に行きましょう」

母親が手を伸ばしてくる。

「だめっ」

あたしは無意識に女の子を抱きしめる。

「どうして邪魔をするの。家族は一緒にいないといけないの」

母親の手が——体をすり抜ける。

「ひっ」

悲鳴にならない声が出る。

同時に寒気が全身を襲う。

「この子はまだ生きてるんです。あなたたちは、もう死んでるんです。成仏して下さい」

とにかく女の子を抱きしめたまま叫ぶ。

「お姉ちゃん、これ……」

と、女の子があたしの腕の中でもぞもぞと動いて、なにかを見せてくる。

「なに？」

それはお札だった。

「さっき、これをお父さんとお母さんに見せなさいって、おばちゃんがくれた」

「お父さんとお母さんにお札を……」

もしかして。

「じゃあ、見せようっか」

女の子は、うんと頷いた。

「よし、見せて」

女の子を両親の方に向ける。女の子は、そのお札を両親に見せる。

パチツという音がして、両親が少し離れる。そして、次の瞬間、紫色の光が両親を包む。

「サクラ、一緒に逝きましょう」

母親はなお手を伸ばしてくるが、お札のお蔭だろうか、それ以上は近付けないみたいだ。

その間も、二人の体は光に包まれ、徐々に消えていく。

やがて、二人の姿も光も消えた。

「助かった……」

あたしは女の子を抱きしめたまま、ぺたんと座り込んだ。

*Fino.*

## 少女を誘う

<http://p.booklog.jp/book/111386>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111386>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト